

文部科学大臣賞

中学生の部



「心の架け橋」

米沢市立第二中学校
2年 後藤^{ごとう} 凜子^{りんこ}さん

「虹の橋交流」、それは私達の生徒会活動の一つで、年二回、学区内の特別支援学校の生徒さん達と交流する活動のことです。

私は、今年の六月に生徒会の執行部として活動に参加することになり、みんなで楽しめる遊びを考えることになりました。先生が、

「支援学校の生徒さん一人一人、誰でも楽しめる遊びを考えて下さいね。」

とおっしゃいましたが、「誰でも」というのは、私達にとって大変難しいことで頭を悩ませました。

「どんな遊びにしたら楽しんでもらえるかな。」

「みんなが楽しめるってなんだろう。」

友達と意見を交わしたり、パソコンなどで調べたりしましたが、イメージを掴むことができずにいました。そこで、以前、特別支援学校に勤務されていた先生にアドバイスを頂き、ボッチャ、風船バレー、ダンスと三つの活動を行うことに決めました。

ボッチャでは、ボールを投げやすいようにスターラインを変えたり、車椅子にボールを付けて転がすようにしたりする配慮をしました。さらに、点数の表示では視覚的にわかりやすいよう数字だけではなく、果物の数で点数を表して誰にでもわかりやすいように工夫をしました。

いよいよ当日、私はとても緊張していました。しかし、一緒に活動していくうちに、次第に私の心が温かくなっていくのを感じました。

「一点入ったよ。」

「絶対に勝とうね。」

それは、私が普段の体育の時間に味わう楽しさであり、達成感と同じでした。「特別支援学校の生徒さんが楽しめる配慮」は、決して一方的なものではなく、

私達自身も楽しむためにも大切な工夫だと感じました。

活動を終えると支援学校の生徒さん達は、

「まだ帰りたくない。」

「もっと遊ぼうよ。」

と言つて、送迎のバスに乗らない人までいました。私自身も名残惜しい気持ちでいっぱい、心の中で同じことを繰り返していました。それは、「執行部として役割を果たした」という成就感ではなく、心が通じ合つたと言つ喜びました。つまり、大切な友達が増えた嬉しさなのだと思います。このような思いは、実際に体験しなければ感じる事ができないことです。

私は、自分が交流体験を通して感じたことや学んだことを、全校生徒に伝えることがとても大切になってくるのではないかと考えました。私の通う中学校には、支援学級が四学級あり、様々な障がいを持った仲間が学んでいます。しかし、学校生活を振り返った時に、支援学級の仲間達と接する機会が、とても少なくて残念に思つたからです。支援学級の皆さん

が在籍する交流学級の人達にしても、行事や限られた交流の中でしか接することができません。休憩時間などの何気ない会話の中でこそ、「仲間」としてお互いに思いやりを持つて成長することができると思っています。

先日、あるパラスリートがパラリンピックでメダルを獲得するまでのドキュメンタリー番組を観ました。困難を乗り越えた努力は勿論ですが、ソフトボールが大好きな私にとつては、とてもかっこいいと感じました。パラスリートの方達が、「障がい者」ということで特別視されずに称えられるようになって欲しいと思います。

私は、特別支援学校の生徒さん達との交流を通して、一人一人の体と心に寄り添ふことで、互いが笑顔になり幸せな気持ちになることを学びました。誰もが「温かい」と感じる世の中にするために、まずは私の通う学校から、限られた「交流」ではなく、心の通つ「触れ合い」を大切にしていきたいです。